

こころの窓

芹沢光治良

くしんろ

書

井沢
光治
良文
庫
念

こころの窓

著者◎・芹 沢 光 治 良

発行者・佐 藤 亮 一

発行所・新 潮 社

郵便番号 1 6 2

東京都新宿区矢来町 71

電話 東京 (260) 1111

振替 東京 8 0 8 番

光邦印刷・神田 加藤製本所

定価・380 円

昭和 41 年 1 月 10 日 発行

昭和 48 年 11 月 30 日 26 刷

Kôjiro Serizawa Printed in Japan

も
く
じ

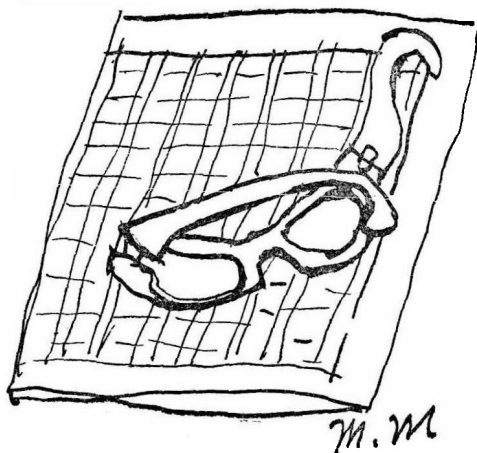
野の花・フ	
フランス人の生活の知恵・	21
自己を表現すること・	28
母と娘の幸福のために・	35
一日を生涯として生きる・	42
故郷について・	49
相互理解について・	56
死の音・	63
ほんとうのしつけ・	70
オリンピック騒ぎ・	77
秋を待ちのぞんで・	84
一足の靴の話・	91
真実の宝をのこす・	98
人生における人との出会い・	105

フランス人Lさんの秘話・	112
三十数年間大切にしたハンカチ・	119
友達をつくるよろこび・	126
おいぼれ剃刀・	133
素直に賞を喜ぶ心・	140
書簡集と花嫁・	147
ある人の死に・	154
ゆううつな朝夕・	161
生きた石ころや盆栽のたのしみ・	168
「母の語る歌」とはこんなものなのか・	175
或る投書の教えたもの・	182
オルレアンの白い水車・	189
遠来の客・	197
あとがき・	203

こころの窓

カット・森
田
元
子

野
の
花



日本では、この婦人のような女性が、目立たないところにあちこちかくれているのではなからうか。そして、みなこの婦人と同じく、はれがましく文章に書かれたりすることを好まないで、そっとしておいてもらいたい、いうのではなからうか。私が野の花と題したのも、その心をくんだからですが、氏名や市の名を仮名にしたのも、そのためです。

*

三四年前のことです。故郷のA市が市の記念祝典をもよおす際

に、市歌を募集して、私は選者になったことがあります。和歌や俳句のさかんな都市でして、四百篇以上あつまった詩のうちから、土地の歌人や俳人や詩人が選をして、二十篇ばかり選んで、それを私のところへ持参して、そのうちから一等と二等を選ぶというのが、私の役目でした。

私はその二十篇のほかに、応募作品にも全部目をとおしたが、選ばれた二十篇がやはり佳作でした。その二十篇から二篇を選んだが、さて、そのいずれを一等にすべきか、大変迷いました。

一篇は郷土愛をうたいあげて、実にみごとですが、用語などがどこか古くて、稚拙なところがあるのです。しかし、その稚拙なところに、新鮮な感覚もあつて面白く、二等にしてしまえないのです。他の一篇は立派でもあり、無難ですから、一等にして誰も納得するものですが、前の作品ほど面白味はないのです。用語などをなおして、そちらを一等にしようか迷ったが、それでは片手落のようですし、無難な作品を一等にきめました。もちろん、応募した作品には、氏名が書いてありませんから、作者が誰か、知りませんでした。

A市ではその作品を市歌として作曲を芸大の若い教授に委嘱いじやくしました。そして、市の記念祭典の日に、市歌の発表をすることになり、私も選者として招かれて、A市へいきまし

た。

市歌の発表会は市の公会堂でありました。一等と二等の作者に、賞品の授与があつてから、新制高校の男女生徒の新市歌の合唱があつて、式がおわたつたのですが、一等の作者は若い高校の国語教師でしたが、その背広の先生の横の椅子に、二等の作者が、ちょこんと掛けてゐるのです。一等の先生のお母さんぐらいの年輩の婦人で、そんな晴れがましい席に出るのも初めてだというようなつましい恰好で、田舎のお婆さんといいたいような人です。それが、とても印象的で、このお婆さんが、あの郷土愛にもえた詩の作者だったのかと、私は驚いて、興味をもちました。

式がおわつて、会場を出ようとすると、そのお婆さんが、つかつか私に近づいて、

「先生、私は岡島はるです、先生の同級生の……覚えていらつしやらないでございませうね。私は先生が小学生のころ着ていた着物の縞まで覚えております」と、名をのるのです。「先生のご出世を遠くから仰いでいました。先生が選者であるときぎまして、応募しました。その市歌が先生に近づけばいいと思ったままで、当選など考えておりませんでした

—」

そう話すのを聞きながら、お婆さんの顔を見ると、だんだん少女の面影がうかんで

来て、小学校時代の同級生の岡島はるになったのです。

*

もうやがて半世紀も昔のことです。

故郷の村がA市に編入されないころ、私は山の麓の男女共学の小学校にかよっていました。小学校の四年までが義務教育で、それから高等小学になったが、高等一年と二年は生徒の数が少なくて、やむなく男女生徒が一教室で、ほんとうの共学することになったのです。

岡島はるはその時の私の同級生です。

男子が三十人女子が二十人ぐらいのクラスでした。岡島はるはクラスで男女を通じて、一番できる生徒でした。級長も選挙できめるのではなくて、受持の先生が成績のいい者を指名するのですが、女子を級長にしては都合がわるいらしく、いつも私が級長、岡島はるが副級長でした。教室の机は二人がけで、男と女とをならべると、クラスが静肅になるというので、男女が一つ机にならんだが、級長と副級長は、出口に近い最後の机にならんでいました。

私は級長ではあるが、副級長の岡島はるに一番をとられるのが、子供心に残念でたまきませんでした。

私は前から気がついていたが、岡島はるは黒板の文字をノートに写すときに、いつも私のを盗見するのです。試験のとき、先生が問題を黒板に書くと、私に読んでくれと頼みました。それを咎めると、彼女は困ったようにして、見えないからというのです。私は岡島はるが盲目になったかと驚いて、先生に告げました。先生は私たちの机のところへ来て、悲しそうな顔で、

「やっばり、あのハンカチのへりかがりがいけないね。近眼になったんだね」と、いったことを、今もおぼえています。

その当時、私の村では女がハンカチのへりかがりの内職をしていました。アメリカへ輸出するハンカチだということでしたが、A市から何ダースか届けて来るハンカチを、一枚ずついいねいにへりを縫いあげ、模様をかがりあげて、工賃をもらうのです。

岡島はるの家は貧しいらしく、お母さんが橋のたもとで一文菓子屋をしていたが、岡島はるは店先の明るいところへ、「ハンカチ台」をもち出して、いつもハンカチのへりかがりをしていました。受持の先生は学校の往來に橋をわたるので、岡島はるの内職を知ってい

たのでしよう。先生は内職をやめなさいと、岡島はるにいったが、内職をやめれば、月謝がはらえないから、止めることができないと、答えました。めがねをかけることなど、考えつかないころですから、彼女は黒板の字が見えないまま、副級長をつづけて、背後席にいて、成績は私と一番を争っていました。

高等二年（六年）を卒業するとき、校長はじめ多くの先生が、岡島はるを女学校に進学させるように、家人をといたけれど、貧しいために、進学できませんでした。そのころ、私の家も彼女と同様に貧乏で、中学校に進学することなど経済的に不可能でしたが、校長などの熱心なすすめで、中学校を受験したのです。

中学校に入学してみると、貧しくても勉強ができて、それから私の一生の道がひらけたが、それ以来、岡島はるに会ったことがなかったのです。ただ、故郷のことなど思うとき、ふと彼女の一生がどんなものであろうか考えるような場合もあったのですが――

＊

その岡島はるがお婆さんになって、私の前に立っているのです。

「覚えています。黒板の字が見えなくて、困っていたことも……一体あれから、どんなに

くりましたか」

私は思わずそんな言葉をかけていました。

立話で、彼女の一生を安易にきいたわけではなかったが、岡島はるは、はずかしそうにして話しました。その話は――

あの時、私も先生のように中等教育を受けたかったです。でも、貧乏で……女学校にいかなくても勉強はできるだろうと考えて、自分を慰めました。書物と新聞を読んだら、学校へいかなかったも、勉強になるだろうと思ったが、家では、新聞をとっていませんし、書物なんか、あのころ自由に手にはいりません、古新聞をもらったりして、むさぼり読みました。新聞って、一日分でも読み度があつたし、わからないことも多かったが、勉強にはなりました。毎日新聞をとれるような身分になりたいと、いつも思いました。それと、間もなくこの地方の娘が誰もするうちに、私も和裁をならいかよいましたが、小さいときから、ハンカチのへりかがりをしたせいで、手が器用でしたから、和裁では村一番にうまい娘になりたいと、心がけました。和裁のお師匠さんに可愛がられて、上達もはやく、他人のものをたのまれて縫うようになりました。少しでも縫賃がはいるようになると、私

は思いきって新聞をとることにして、どんなことがあっても一日に一時間ぐらい読む習慣をつけました。

新聞に書いてあることでわからないことは、裁縫している間に考えるようにすると、裁縫もあきませんでした。そのうちに、和裁なら一通りのものができて、お師匠さんから許されて、家にお針っ子が集まるようになりました。

そのころ、縁談もあつたが、いつも私は、結婚したら新聞を読ましてくれませんか、まず条件を出しました。田舎のことですし、新聞を読む嫁さんなんて、相手にしてくれませんか、その条件で、どの縁談もこわれました。一日に半時間か一時間ぐらい新聞も読めないような生活なら、結婚してもしあわせにはなるまいと考えて、私は破談になることを苦にもしませんでした。婚期がおくれましたが、急ぎませんでした。お針っ子を相手に一生をすごしてもいいと、安心していたんです。

そのうちに、今の主人が新聞を読んでもいいというので、結婚してくれました。とび職で気は荒かったが、私はお針のできることと読書のできること、幸福でした。自分の子供には、私が学校へいきたくていけなかったようなことがないように、ただ必死で一生くらしただようなものです。おかげさまで、三人の子供は、私たちとしてはこれ以上望めない